

【2012年度卒業論文要旨】

美術館という空間とその場所性

鶴川 真琴

美術館は、「もの」を経済的価値など現実の関心や、場所といった文脈から切り離し、1つの独立した「作品」として展示する空間である。人々は日常世界から隔絶した“美術館”という非日常の空間で、作品に向き合う。このとき鑑賞者の感覚は、お金を稼いで使う、というような日常的で現実的な関心から一步離れたところにある。この状態をカントは、日常の諸関心の「括弧入れ」と表現した。すなわち美術館は人々が「括弧入れ」をするための空間である。

現代の都市空間において、美術館は閉ざされた美の殿堂や排外的な権力装置として存在していない。むしろ、その立地する場所が美術館の集客やイメージ作りに貢献し、また美術館の存在自体がその場所に新しい意味や価値を与える、という相互作用によって、美術館はその空間を場所へ開き、場所と結び付いている。場所へ結び付くことは、非日常の空間であるはずの美術館を日常の延長線上に開放し、「括弧入れ」の機能を弱めているよ

うに思われる。しかし、美術館は場所へ開くと同時に、永遠にその場所や風景に溶け込み埋没しない、「異物」として存在し続けることでその空間を閉じてもいる。異物として場所から浮遊する美術館は、単調な日常生活を送る人々を一瞬にして日常の外へと引き離し、事物を芸術として捉え楽しむ「想像力」を与え、またもとの日常へ戻す。一度その経験を味わった人々は、広大な日常生活の領域、いわば開いた世界にふと現れる芸術をも発見するようになり、研ぎ澄まされた感覚で再び美術館へ足を運ぶ。

「閉じる」と「開く」、「つながる」と「隔絶する」という、相反する概念は美術館の両輪であり、人々の感覚を日常から非日常へ、そして再び日常へ、というように、俗の空間と聖の空間を行ったり来たりさせる。このようにして、美術館はその場所に生きる人々の感覚を更新し、より充実した日常を予感させるような空間であると、私は思っている。

送迎保育の現状と効果に関する一考察 — 埼玉県東南部の実施自治体を事例に —

木内 智子

送迎保育ステーションとは、駅前等の利便性の高い場所に設置した施設において、保育所の開所前・閉所後に児童を保育するとともに、複数の認可保育所へ児童を送迎することで、安心して子育てができる環境を整備する送迎保育事業の拠点である。

本論文では、都内への通勤者が多く保育需要が高いこと、また2012年現在埼玉県内で送迎保育を設置している8市のうち4市が近接していることから、埼玉県東南部の越谷市、草加市、八潮市、吉川市の4市を対象地域とした。4市の送迎保育事業については、各市の担当と送迎保育の実施者からの聞き取り調査により事業の内容と

現状を明らかにした。設置による効果については都内への通勤を想定した場合の時間的・空間的制約のシミュレーション及び送迎保育ステーションでの観察をもとに考察した。

シミュレーション分析の結果、送迎保育事業の設置当初は送迎保育の利用者として都内への通勤者が想定されていたが、埼玉県の子育て支援計画に沿って延長保育を実施する保育所が増え、開所時間が長くなってきたことで、対象地域では就労時間と保育時間のギャップは埋められる傾向にある。ゆえに、都内に通勤していても9時～17時の定時勤務であれば、送迎保育を利用せずに保